

※著者情報・参考文献は本文内に記載

- I 八幡塚古墳なくして「埴輪」は語れず
1 昭和4年埴輪群像発見される
II 三日市塚古墳の埴輪

- I 八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く（若狭）
1 塩輪配列の分類
2 塩輪配列のエッセンス
3 塩輪配列の意味

- I 八幡塚古墳なくして「埴輪」は語れず
1 昭和4年埴輪群像発見される
II 三日市塚古墳の埴輪

- I 八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く
1 塩輪配列の分類
2 塩輪配列のエッセンス
3 塩輪配列の意味

- I 八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く
1 塩輪配列の分類
2 塩輪配列のエッセンス
3 塩輪配列の意味

- I 八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く
1 塩輪配列の分類
2 塩輪配列のエッセンス
3 塩輪配列の意味

- I 八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く
1 塩輪配列の分類
2 塩輪配列のエッセンス
3 塩輪配列の意味

- I 八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く
1 塩輪配列の分類
2 塩輪配列のエッセンス
3 塩輪配列の意味

- I 八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く
1 塩輪配列の分類
2 塩輪配列のエッセンス
3 塩輪配列の意味

- I 八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く
1 塩輪配列の分類
2 塩輪配列のエッセンス
3 塩輪配列の意味

- I 八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く
1 塩輪配列の分類
2 塩輪配列のエッセンス
3 塩輪配列の意味

- I 八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く
1 塩輪配列の分類
2 塩輪配列のエッセンス
3 塩輪配列の意味

保渡田八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く

—群馬の埴輪様式を考える—

若狭 翁（当館学芸員）

※著者情報・参考文献を読み解く▼
保渡田八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く



- I 八幡塚古墳なくして「埴輪」は語れず
- II 八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く
- III 塩輪配列のエッセンス
- IV 塩輪群像の配列様式とその意味

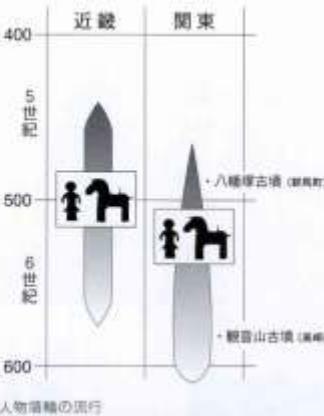
この特別展の目的

- 1 この展示の目的は、「保渡田八幡塚古墳の埴輪群像」を徹底検証することである。
- 2 八幡塚古墳の埴輪群像は、わが国の埴輪研究の一循環資料として知られる。この資料を読み解くことは、埴輪の作られた意味を知るために欠かせない作業だといえる。
- 3 今から約70年前（昭和4年）に出土した八幡塚古墳の多量の埴輪群は、正確な調査記録が残され、研究に欠かせない資料として語られてきた。しかし調査記録は、長年の間に分断・散逸し、その英断はほとんど分かっていないといった。
- 4 近年私たちは、分散した埴輪を巡回調査し、資料化を行ってきた。さらに史跡整備に伴って、かつての埴輪出土箇所を再調査し、取り残しの埴輪片などを回収した。これに伴い新しい発見も加えられた。
- 5 こうしたデータをもとに、昭和4年の記録を明瞭化し、八幡塚古墳の史跡整備に「埴輪群像」を復元した。
- 6 この展示は、群馬県教育委員会・群馬町誌編纂委員会・かみつけの里博物館が、先駆的保渡田八幡塚古墳の整備に当たり、10年間にわたり続けてきた地道な調査研究の成果と位置づけられる。

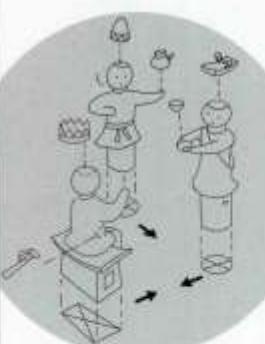
例 説

- 1 本書は、かみつけの里博物館第7回特別展・平成12年群馬の博物館展「はにわ群像を読み解く」の展示解説図録である。
- 2 本特別展の開催に当たっては、群馬県博物館連絡協議会および加賀館の助成・協力を受けた。
- 3 本特別展の企画・構成は学芸員若狭翁が行い、学芸員内田真澄が全般にわたり補佐した。
- 4 本書の編集は若狭・内田が行った。なお、本書は、付帯事業で行われる講座発表要旨を兼用したスタイルとなっている。
- 5 本特別展は以下の通り実施される。
 - 会期 平成12年10月25日（水）から12月4日（月）
 - 会場 高崎市等広域市町村圏振興整備組合立 かみつけの里博物館 企画展示室
 - 付帯事業
- 講談座「徹底検証・埴輪群像を読み解く」（要旨は本書に掲載）
 - 10月29日 若狭 翁（当館）「群馬県保渡田八幡塚古墳の埴輪群像を読み解く」
 - 11月 5日 日高 憲（日本学術振興会特別研究員）「埴玉舞埴玉瓦塚古墳の埴輪群像を読み解く」
 - 11月12日 杉山雅作（国立歴史民俗博物館助教授）「千葉県境塚古墳の埴輪群像を読み解く」
 - 11月26日 梅澤重昭（前群馬大学教授）「群馬県諏訪郡吾山古墳の埴輪群像を読み解く」
- 体験コーナー 塩輪に変身／復元衣装・復元装飾品を着て埴輪の姿に変身する（会期中実施）

I 八幡塚古墳なくして「埴輪」は語れず



復元整備された古墳田八幡塚古墳



コラム
Column A

八幡塚古墳の形象埴輪配列

八幡塚古墳では、古墳内のいろいろな場所に形象埴輪（人・動物・器物・家）が立てられた。その数は100体以上。形象埴輪は、立てられた場所ごとにちがう意味をもっていたと考えたい。

①外堀上の置物人埴輪

古墳の一番外側（外堀）に、沿河人埴輪（橋を横え、重めいし橋をした人物）が立てられていたことが最近の調査で分かった。その数10体以上。外界からやってくる邪惡なものから古墳を守るために並べられたと考えられる。

②中島の家形埴輪

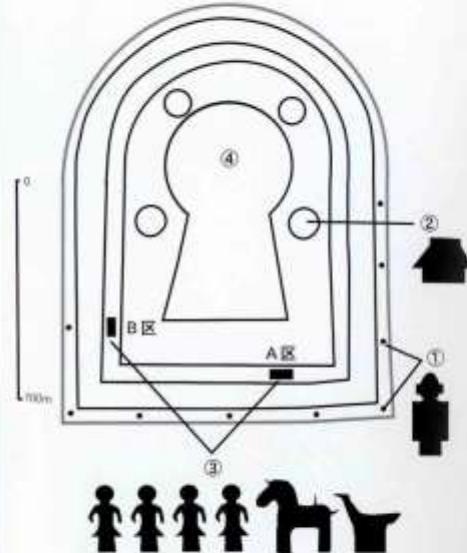
内堀のなかにある中島には家形埴輪が立てられた。

③内堤上の人物・動物埴輪群像

内堀と外堀の間の堤の上に、人・動物埴輪の群像が二カ所（A区・B区）見つかっている。残りの島の島の島には50体以上の多数の埴輪が配置された。今日の表示では、この群像の意味を読み解いてゆく。

④埴輪部の埴輪（推定）

はっきりとは分かっていないが、他の古墳の事例から八幡塚古墳の頂上にも家形埴輪や道案の埴輪が置かれたことであろう。死者の眠る場所を示す。死んで墓にいるために置かれたと考えられる。



八幡塚古墳の形象埴輪配列

●埴輪研究にはなにが大切か

人物・動物埴輪は、本来「群像」として古墳に並べられた。埴輪群像は、当時の人々の死生觀にもとづき、ある意味や物語性をもって計画的に造形されたのである。しかし、その意味は未だはつきりと分かっていない。埴輪の話を聞くためには、まずは群像としての並び方の規則（配列状態）を明らかにしなければならない。

- ①どのような種類（人・動物・器物）があるか。
- ②どのような職業（役割）がみられるか。
- ③どのような服装で何を持っているか。
- ④どんな仕草をしているか。
- ⑤各々がどのような向きで、どんな関係性で置かれているのか。

人物埴輪が出土する古墳は数多い。しかし、右のような条件を満たす例は実に少ない。八幡塚古墳の埴輪は、わが国の調査例の中でも、突出した数の多さ、出土位置の明確さにおいて、最も優れた資料の一つである。八幡塚古墳なくして「埴輪群像」を語ることはできないのだ。

しかし、七〇年前に出土した八幡塚古墳の埴輪は、時代の波にほんろされ、ある者は行方不明となり、ある者は記録を失い、その実態は近年まで不明確であった。この展⽰では、その実態を示し、埴輪配列のあり方を推定していくことにしたい。

●保渡田八幡塚古墳とはどんな古墳か？

保渡田八幡塚古墳は、群馬県の西部、榛名山の東南の麓にある大型前方後円墳。五世紀後半から六世紀初めにかけて築かれた三つの前方後円墳からなる保渡田古墳群のひとつである。保渡田古墳群は、豪族居館三ツ寺（了道跡を拠点にこの地域を治めた。東日本でも有数の豪族たちの墓所なのである）。八幡塚古墳は五世紀末の築造と考えられる。全長九十六mの墳丘は、内堀・外堀・外周護によって三重に開まれ、全長一八八mの墓城を誇る。中心の埴輪群設は巨大な舟形石棺で、墓域には推定六〇〇本もの円筒埴輪や、一〇〇体を超える人物・動物埴輪が立て並べられていた。

●八幡塚古墳の埴輪は東国埴輪模式のバイオニア

人物・動物埴輪群像は、五世紀中頃の近畿地方で出現し、東日本に波及する。近畿地方では、六世紀後半になると埴輪は衰退するが、遅に関東地方において独特な発達を遂げる。そして六世紀の終末頃には衰退する。

八幡塚古墳を含む保渡田古墳群の埴輪群像（五世紀後半）は、関東地方では古い段階のものである。関東の埴輪群像のスタイルは、五世紀後半頃、群馬県保渡田古墳群、埼玉県埼玉郡剪刀山古墳、茨城県三咲塚古墳などを娶った関東有数の大首長によつて整備が図られたのである。これらの中で、埴輪群像の配列がしっかりとわかっているのは、八幡塚古墳だけである。